

日本旧石器学会

ニュースレター 第34号

NEWS LETTER No. 34

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



世界遺産ラスコー展 「クロマニヨン人が残した洞窟壁画」

海部陽介（国立科学博物館）

（以下ではローカル誌「うえの」に寄稿した一般向け紹介文を転載し、末尾に情報を加筆させていただきます。）

これは私がいつか実現できればと願っていた展覧会です。その夢が今、想定以上のかたちで実現しました。

本展の主演はクロマニヨン人で、ご覧頂くのは、彼らがおよそ2万年前に、フランスにあるラスコー洞窟の内部に描いた壁画です。

展覧会の見所は3つあります。まず2万年前の芸術のレベルの高さ。次に芸術の起源。そしてこの絵を描いたクロマニヨン人の正体。展覧会の最後には、もう1つお楽しみがあります。

これらを語る前に、基本的な背景をつかんでおきましょう。

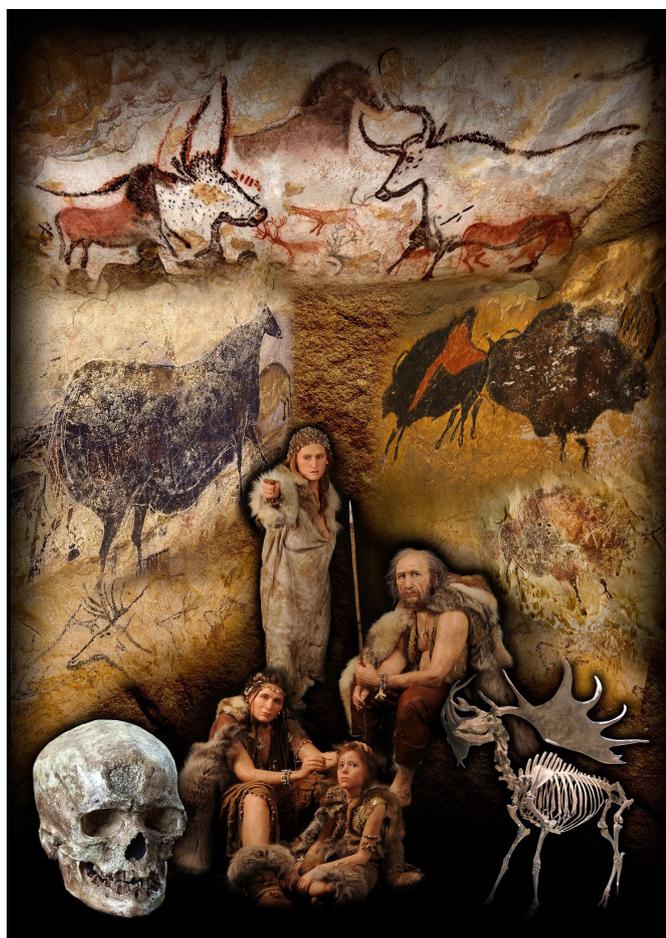
舞台は後期旧石器時代と呼ばれる4万2000～1万4500年前頃のヨーロッパで、クロマニヨン人たちは、そこで野生動物の狩りを中心とする狩猟採集生活を送っていました。参考までに、農耕や牧畜の知識と技術が導入されてヨーロッパが新石器時代を迎えるのは8500年前以降で、エーゲ海でヨーロッパ最古の文明が起るの、それよりさらに後の5000年前頃です。日本列島では1万6000年前頃に土器が出現して縄文時代が始まりますが、クロマニヨン人の壁画が描かれたのは、そうした私たちに馴染みのある時代よりもはるかに昔のことなのです。

ラスコー洞窟は、現在、壁画の保護のために封鎖されているので、現地へ行っても実物を見ることはできません。そこで壁画の精巧なレプリカが作られ、地元で公開するとともに、世界の人々に見てもらうためにこの国際巡回展が、フランス政府公認のもと企画されました。

レーザー測量やデジタルマッピングなどの最新技術を用い、大勢の腕利きアーティストが参加して実物を見事に再現したレプリカです。私自身この展示用レプリカを見に行き、その出来

栄えのよさに感心しまして、日本でのツアーをリクエストしたわけです。ぜひ会場に足をお運び頂き、本やテレビの2次元画面では決して味わうことのできない、岩肌の立体感と実物大の壁画の迫力を、間近からお楽しみ頂ければと思います。

驚きの壁画と彫刻：ラスコー洞窟の壁画は、洞窟壁画の最高傑作と称されます。誰もが2万年も前にこれだけの絵が存在した事実に、驚くでしょう。動物たちをかくも躍動的に描く技術はもちろんのこと、壁面への動物の配置、サイズ感覚、不思議な記号など、見所がたくさんあります。色彩豊かなラスコーらしい動物画のほかに、鳥の頭を持つ人間が登場する謎めいた《井戸の場面》という絵も、必見で



す。

さらに本展では、日本限定で、いくつか特別なものを用意しました。

まずランプ。真っ暗な洞窟に入るには灯りがいりますが、クロマニオン人たちはそのために石製のランプを使いました。ラスコー洞窟からは、数あるそうしたランプの中でも最も精巧につくられ、最も有名なランプが見つかりましたが、それが日本にやってきました。

そして骨・角・マンモス牙などを素材にしたクロマニオン人の秀逸な彫刻や線刻作品の数々を、日本のために特別に貸して頂けることになりました。先史美術の本に必ずと言ってよいほど紹介される《体をなめるバイソン》など、いくつもの国宝級の品々が並びます。壁画に加えて、クロマニオン人芸術の奥深さを理解するために必見の品々です。

最後に、ラスコー洞窟の内部から見つかった石器や骨角器は、ここにいたクロマニオン人が使っていたもの。彼らの息吹を感じさせるこれらの道具は、フランス国内でも展示されたことがなく、世界初公開とのことです。

芸術の起源を知る：そのように見るものの心を動かす芸術は、700万年におよぶ長い人類の歴史の中でいつ芽生えたのでしょうか？

本展では、ヨーロッパにおける過去60万年の人類史に注目し、クロマニオン人以前の当地の住人であったハイデルベルク人やネアンデルタール人には、そのような芸術的活動の証拠がないことを説明します（末期のネアンデルタール人はアクセサリーを作ったかもしれないのですが、これはクロマニオン人の行動を模倣した可能性があります）。

従って、少なくともヨーロッパでは、芸術の起源はクロマニオン人にあると言えます。ですから彼らの正体、つまりどこから来た誰なのかがわかれば、人類史における芸術の起源という謎に迫れるでしょう。

クロマニオン人の正体：クロマニオン人の素性を、化石人骨から確かめます。彼らの頭骨のかたちは私たちのものと同様であり、さらにDNAも共通しているのです。彼らは私たちと同じホモ・サピエンスであることがわかります。そのホモ・サピエンスは、20万～10万年前頃のアフリカで進化したことが明らかになっていますので、つまるところ彼らは・・・？ そして芸術の起源も・・・？ 後は皆さんがお考えになるか、あるいは展覧会場へお越しください。

そのときの日本列島：本展を締めくくるのは、

「クロマニオン人の時代の日本列島」という特別コーナー。ヨーロッパで壁画が描かれたところ、日本列島へ渡ってきた祖先たちは、一体何をしていたのでしょうか？ 日本旧石器学会の協力のもと、縄文時代以前の日本列島で祖先たちが織りなした、知られざる多彩で創造的な活動をご紹介します。私が代表を務めて推進している「3万年前の航海徹底再現プロジェクト」の活動も、実はそこに関係があります。

国立科学博物館というタイムカプセルに用意しましたクロマニオン・ワールド。そこには私たちとは何者なのかを探るヒントがありますので、ぜひご体感ください。

～展覧会の基礎情報～

国立科学博物館（東京）

2016年11月1日～2017年2月19日

東北歴史博物館（宮城）

2017年3月25日～2017年5月28日

九州国立博物館（福岡）

2017年7月11日～2017年9月3日

公式サイト <http://lascaux2016.jp/>

監修：海部陽介

学術協力：五十嵐ジャンヌ、佐野勝宏

協力：日本旧石器学会（佐藤宏之、堤隆、長崎潤一、野口淳、藤田祐樹、山崎真治）

本展は、フランスで製作され世界巡回をしている「Lascaux International」の展示パッケージに、日本の方々が親しめるように独自要素を追加して構成した展覧会です。以下に主な展示品を紹介します。一部、会場によって内容が異なりますのでご注意ください。どれもなかなか見られないものですので、どうかお見逃しなく。

国際巡回展の展示物

- ・実物大のラスコー洞窟の精巧な再現壁画 5 点。3 館を巡回します。
- ・クロマニオン人の精巧な復元模型。3 館を巡回します。

日本版限定の特別展示品。フランス諸機関のご厚意により実現いたしました。

- ・ラスコー洞窟内で出土・回収された石器類・顔料（古人類学研究所（パリ）所蔵）。世界初公開となります。3 館を巡回します。
- ・アシュール文化、ムスティエ文化、オーリニャック文化、グラヴェット文化、ソリュートレ文化、マドレーヌ文化の代表的な道具セット

(フランス国立先史博物館(レゼジー)・古人類学研究所(パリ)所蔵)。以下のタイプサイトからの出土品が含まれます:サン=タシュール遺跡出土のハンドアックス、ル・ムスティエ遺跡出土のムスティエ尖頭器、ラ・キーナ遺跡出土のキーナ型スクレーパー。3館を巡回します。

- ・ラスコーのランプ(国立考古学博物館(サン=ジェルマン=アン=レー)所蔵。実物は東京会場限定です。
- ・「体をなめるバイソン」などの美術品(国立考古学博物館(サン=ジェルマン=アン=レー)所蔵。実物は東京会場限定です。多くのものについて、他会場には精巧なレプリカが展示されます。
- ・角を持つヴィーナス(ローセルのヴィーナス)などの美術品・道具類(アキテーヌ博物館(ボルドー)所蔵)。九州会場限定です。

公式展示図録(2500円+税)

2016年度普及講演会報告

2016年11月23日(水)の祝日に、国立科学博物館にて開催中の「特別展 世界遺産ラスコー展」の記念講演会「クロマニヨン人の時代の日本列島」とタイアップして開催した、日本旧石器学会2016年度普及講演会について報告する。報告に先立ち、タイアップをご承諾いただいた主催者の国立科学博物館、海部会員に心よりお礼申し上げます。講演者は以下のとおりである。

1. 海部陽介(国立科学博物館、本会会員)「アフリカから日本にやってきた現生人類(ホモ・サピエンス)」
2. 佐藤宏之(東京大学、本会会長)「日本の独特



写真1 講演の様子(海部陽介会員)



写真2 講演の様子(佐藤宏之会長)

な後期旧石器文化」

会場の日本館2階講堂は、定員100名ほぼ満席の参加者があった。

海部会員と佐藤会長の講演は、特に事前の打ち合わせはなかったとのことだが、あらかじめ役割分担があったかのような、みごとに連携のとれたものだった。海部会員の講演の中での、旧石器時代の人そのものを研究対象とする人類学と、その人間行動を研究対象とする考古学という説明を、聴衆は講演内容をつうじて実感できただろうと思う。

海部会員の講演は、アフリカを舞台とした人類進化、原人の拡散、アフリカでの新人の出現、出アフリカと拡散、日本への渡来など、人類進化の基本を丁寧にかつ分かりやすく解説したものである。ラスコー展を記念した講演ということもあって、新人的行動やその生物学的な背景なども丁寧に説明されていた。

佐藤会長の講演は、日本の後期旧石器時代について気候や植生、動物相などの環境、新人的行動やその認知心理学的説明(ミズンのモジュール仮説)などの解説の後、日本独特の旧石器文化(新人的行動)として、後期旧石器時代初期の環状ブロック群、局部磨製石斧、陥し穴をあげ、それらの行動論的背景を含めて説明した。

二人の講演内容については、丁寧かつ一般の聴衆を意識しながらも学問的に深い内容にもあえて触れており、筆者は、旧石器研究者として大変興味深く聞くことができたとともに、日頃の業務で一般向け講演をする機会のある身としても大変勉強になる講演であった。

印象深かったのは、海部会員が講演の冒頭に聴衆に向かって、「縄文時代の前の時代の名前を知っている方は手をあげてください。」と問いかけたところ、筆者の予想以上に挙手した人の数が少なかったことである。日本における旧石器時代の認知度の低さを思い知らされた。その一方で、日本の旧石器時

代遺跡として把握されている遺跡の数は、多分世界最多であろうとのことである。筆者は、旧石器時代研究者として、日本旧石器学会員として、文化財保護にたずさわる者として、日本における旧石器時代の存在とその歴史的意義の周知がまだまだ足りないことを実感した。広報担当では、普及講演会を、東西日本でバランスよく開催したいと考えている。今回の講演で感じたことを踏まえ、今後とも広報や普及活動を進めていかねば、と思った次第である。

(日本旧石器学会広報委員会)

2015 年度日本旧石器学会賞 受賞者報告

ニューズレター第33号で報告しましたとおり、2015年度学会賞に池谷信之氏（明治大学黒曜石研究センター）、2015年度奨励賞に国武貞克氏（奈良文化財研究所）が決定しました。「日本旧石器学会賞選考委員会による選考理由」および「受賞者の言葉」を報告いたします。

2015年度学会賞：池谷信之会員

(明治大学黒曜石研究センター)

選考理由

学会賞は旧石器研究の発展に貢献し優れた業績を上げた会員に授与する。学会員からの推薦に基づき、当委員会は池谷信之会員を2015年度学会賞受賞候補者として選考した。池谷会員は、1990年代以降、望月明彦氏らとともに蛍光X線分析による黒曜石産地推定を推進し、遺物・遺跡研究への応用について重要な貢献を果たした。従来、分析点数の制約から考古学的な分析・解釈に限界があった産地推定による研究を「全点分析」データに基づく実証研究へ導いた功績は大きい。中性子放射化分析、波長分散型蛍光X線分析等の定量分析に対して、非破壊・大量分析の前提となるエネルギー分散型蛍光X線分析の有効性についても積極的に検証している。また、産地推定をもとに後期旧石器時代の海上渡航や縄文時代の流通ネットワークなどに関する研究に多くの成果を上げている。池谷会員はこれらの成果を単著『黒曜石考古学』をはじめ国際誌を含む多数の論文として積極的に発信している。以上の業績は学会賞に相応しいと考える。

(日本旧石器学会賞選考委員長 島田和高)

受賞の言葉 (池谷信之)

このたび日本旧石器学会賞という大変栄誉ある賞を頂くことができました。多くの優秀な研究者がいるなかで選出されたことは、私にとって大変な栄誉



写真1 池谷会員授賞風景

であり、身余ることであるとの思いもいたしております。

40年以上も前に、伊豆の田んぼの中で泥だらけになりながら夢中で弥生土器を拾っていた少年も、60歳を手前にして、これまでのキャリアを振り返りつつ、今後の研究の方向性を考えるようになりました。

考古学を志して明治大学に入学した直後は弥生時代を専門に学ぶつもりでしたが、いつしか縄文時代の発掘調査に足繁く通うようになりました。その中で縄文土器の造形的な美しさと時空的な多様性に心を奪われ、編年研究の道を志しました。さらに遺跡内での土器の空間的な配置や廃棄から、集落の構造を解明することを試みていましたが、この研究が実を結ぶことはありませんでした。

そんな頃、沼津工業高等専門学校に在職していた望月明彦先生と出会い、黒曜石の産地分析を通じて遺跡の構造や集団移動の問題に迫れるのではないかと考えるようになりました。その後の研究については、受賞理由でも触れていただいたように、予想以上の様々な展開と成果を生むことになり、充実した研究ができたと思っています。

いま私は昨年までの職場を去り、自由にできる時間が増えたことに喜びをかみしめながら、次の研究の構想を練り、それに向けて歩みだそうとしているところです。

末筆になりましたが、私の研究に注目していただいた選考委員会の皆様と佐藤宏之会長に改めて御礼を申し上げ、今後のさらなる精進を誓って受賞の御礼といたします。

2015年度奨励賞：国武貞克会員

(奈良文化財研究所)

選考理由

奨励賞は研究者の育成と研究の奨励を目的として、会誌「旧石器研究」等学会刊行物に優れた業績を発表した会員に授与する。近年の会誌「旧石器研究」他に論文等が掲載された若手研究者を中心に選

考を行った。その結果、当委員会は国武貞克会員を2015年度の奨励賞候補者として選考した。国武会員の論文「黒曜石の獲得からみた関東中部地方の移動領域」（「旧石器研究」第11号）は「移動生業領域」論の一環として、「下野－北総回廊」以外の移動領域の復元を試みている。この論文の特徴は、近年悉皆的に集成された膨大な黒曜石産地推定データを用いて、原産地別利用頻度の変遷と空間分布から原産地と居住地間の移動領域を大胆に復元している点にある。より高解像度の時期的変遷、非黒曜石石材利用との比較など、今後の発展性を見込むことができる研究であることから奨励賞に相応しいと考える。

（日本旧石器学会賞選考委員長 島田和高）

受賞の言葉（国武貞克）

この度は、日本旧石器学会奨励賞をいただき、大変光栄に思っております。受賞論文として頂きました研究は、日本考古学協会の栃木大会と長野大会において集成された、関東地方と中部地方の黒曜石産地分析データを基にしたものです。そのため、学界全体の成果の恩恵を受けた研究成果ということになります。集成を企画・担当されました両大会の関係の皆様には、特に感謝申し上げる次第です。

この研究の目的は、移動・生業領域論の一環として、下野・北総回廊以外の移動領域を、客観的かつ広域に、同じ基準で抽出することでした。そのためには、共通して利用される黒曜石の分布を検討することが効果的と考えました。先に述べた考古学協会2大会の集成に基き、後期旧石器時代の全ての時期において、関東・中部地方の全ての地域における、全ての黒曜石産地の利用状況を検討することを、分析の方法としました。具体的には、地域ごとに異なるデータ精度を克服するため、独自の分析視点である原産地別の出現頻度を評価し、その変遷と空間分布を手掛かりにして、移動領域の抽出を試みたものです。

その副産物として得られた原産地別の分布図は、

高原山産以外では目にしたことがなかったものです。それを関東・中部地方において、8原産地別に示すことができ、この点も貴重な成果が得られたと思っています。今後は、これらの分布図を時期別に提示して、移動領域の変遷を、より詳細に検討することを目指しています。また解釈しきれずに、現象のみの提示にとどまった点も多々ありました。分析の高解像度化が課題となります。

この賞は、文化庁での埋蔵文化財保護行政に追われた5年を終えて、奈良文化財研究所に戻り、研究に専念すべきタイミングにいただきました。研究を再スタートしなさい、より一層進展させなさいよと、あたたかい励ましを頂いたかのように思われ、文字どおり励みになりました。またこの論文は、検討すべき資料が膨大なうえ、当時まとまった時間を継続して取れなかったこともあり、出勤前の早朝40分間のみ、ほぼ毎日途切れることなく、半年以上の間カタツムリのように、分析と考察を少しずつ進めて執筆しました。

幸いにも、その成果をご評価いただきましたことにより、どんな状況でも研究はできるものだ、しみじみと実感し、今後の一層の精進を期しているところです。学会員の皆様の日ごろのご指導に感謝しつつ、今後も着実に進んでまいりたいと思っております。この度は、本当にありがとうございました。

2017年度 総会・研究発表・ポスターセッション発表の募集

平成29年7月1、2日に慶應義塾大学三田校舎にて開催する総会での研究発表・ポスターセッション発表を募集します。詳しくは追って、日本旧石器学会HPにおいて掲載しますので、奮ってご応募ください。

また、同日程にて、シンポジウム「使用痕分析を統合した行動研究の展開」（仮）を開催しますので、併せてご参加くださるようお願いいたします。

なお、日程が例年より1週間程度遅くなっておりますのでご注意をお願いいたします。

データベース委員会の活動とご協力のお願い

日本旧石器学会では、今年9月にデータベース「日本列島の旧石器時代遺跡」をウェブ公開しました（<http://palaolithic.jp/data/index.htm>）。データベース委員会では、データの更新・追加を進めると



写真2 国武会員受賞風景

ともにより使いやすいデータベースへの改訂を目指しています。主眼は、位置データの確認・修正、書誌データの外部データベース連携です。具体的な作業方法等については別途ご案内させていただくとともに、必要に応じて実際の作業手順とデータ利用の方法などを確認するワークショップを計画、この12月に秋田県を皮切りに順次、開催します。あわせて各地域・都道府県等においてデータの更新・追加にご協力いただける会員を募集しております。お問い合わせはデータベース委員会委員長 野口 (fujimicho0@hotmail.com) までよろしくお願いたします。

関連学会情報

岩宿フォーラム2016/シンポジウム開催報告

2016年11月5・6日にみどり市笠懸公民館交流ホールにおいて、岩宿フォーラム2016/シンポジウムが開催された。今回、岩宿文化賞の授賞式は11月13日(日)に執り行われた。受賞者は御堂島正氏(大正大学教授)である。

岩宿フォーラム2016は「ナイフ形石器文化の発達期と変革期—浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群—」をテーマとした。群馬地域では、群馬Ⅲ期の遺跡数が従来少ないと考えられていたが、小原俊行氏が近年の調査事例を丹念に精査した結果、想定以上に資料が充実している明らかになってきた。今回その成果を基に、浅間板鼻褐色軽石群と石器群の関係、周辺地域との関連を検討した。

第Ⅰ部 基調講演は長崎潤一氏が「旧石器時代の前半期から後半期への変遷について」と題し、当該期を日本列島の旧石器時代の中に位置付けた。

第Ⅱ部 基調報告1は「浅間板鼻褐色軽石群の降灰期とその環境」をテーマに、早田勉氏が「浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group)の層序と前橋泥流堆積物の層位」、下岡順直氏が「浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group)と前橋泥流の年代観」を報告した。

火山灰の名称は1回の噴火単位で命名されるのが一般的であるが、As-BP Groupに関しては複数回の噴火で降灰した火山灰を対象にしたため、多くの誤解を招いていた。今回浅間山近くの横川大林露頭の分析によって、少なくとも12層の軽石テフラからなる事が明らかになった。また、前橋泥流が浅間板鼻褐色軽石群中の何層目に含まれるのかが議論された。合わせて、浅間板鼻褐色軽石群の年代幅と前橋



写真1 岩宿フォーラム

泥流の年代観が整理された。

第Ⅲ部 基調報告2は「北関東地方の浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群」をテーマに4本の発表があった。

趣旨説明を含めて小原俊行氏が「北関東地方西部における浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群」を発表した。群馬Ⅲ期は従来遺跡数が少ないと考えられていたが、近年の調査によって、南関東と対比できるまで資料蓄積が進んできた。石器群をみると、南関東西部と同じ様に変遷する部分もあるが、いわゆる切出形石器は少なく、縦長剥片を素材としたナイフ形石器が多い。また、国府系ナイフ形石器の編年的位置付けが議論された。

後藤佳一氏は「赤城山西南麓における浅間板鼻褐色軽石群層序と石器群」と題し、浅間板鼻褐色軽石群の細分の中で、最も解像度の高い出土状況が確認されている、北山遺跡出土の横長剥片剥離石器群の位置付を報告した。建石徹氏他は「群馬県北町遺跡及び堀越甲真木B遺跡出土黒曜石石器群の産地分析」と題し、群馬Ⅱ期からⅢ期の黒曜石産地の変化を報告した。窪田恵一氏は「北関東地方における浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群」と題し、茨城県の状況を報告した。

第Ⅳ部 基調報告3は「周辺地域の石器群との関係」をテーマに4本の発表があった。

新田浩三氏は「南関東地方東部の石器群」と題して下総台地を、阿部敬氏は「愛鷹・箱根山麓SCⅢb1~TLL下部期の石器群編年—武蔵野台地Ⅶ~Ⅳ層中部並行期として—」と題して愛鷹・箱根山麓地域の石器群の変遷を報告した。

西井幸雄は「南関東地方における第Ⅴ層段階の石器群」として、第Ⅴ層出土石器群を報告した。須藤隆司氏は「赤城山麓におけるⅡ期の石刃石器群からⅢ期の剥片石器群への変革—地域集団と遊動領域の交替」と題し、群馬Ⅱ期からⅢ期の変化を地域集団の遊動領域の交替と捉え検討した。

討論では、群馬Ⅲ期の遺跡数が少ない原因とし

て、As-BP Groupによる環境変化と、黒曜石採取ルートの変化等が考えられていたが、約5千年間で12回の噴火が人類活動にどの程度影響があるのか、今後具体的に検討して行く必要が指摘された。群馬地域の資料が充実してきたことによって、礫群等を含めた遺跡のありかた、石器群の変遷など北関東と南関東地域の様相に関して意見交換がされた。

(西井幸雄)

第33回 中・四国旧石器文化談話会開催報告

テーマ：後期旧石器時代西日本における交流
—中・四国とその周辺の瀬戸内技法の
広がりとその背景—

日時：2016年11月12日（土）・13日（日）

場所：美祢市民会館

内容：

研究報告1 多田仁「西南四国における瀬戸内技法の伝播」

研究報告2 越知睦和「九州における瀬戸内技法の伝播」

調査報告 遠部慎・及川 穰・小林謙一「上黒岩第二岩陰遺跡の調査」

研究報告3 富樫孝志「東海西部における横長剥片剥離技術」

研究報告4 山根謙二「石器と土器の広域的分布現象の解釈の比較検討」

全体討論

33回目を迎えた中四国旧石器談話会は、山口県美祢市で行われ、35名が参加した。今回のテーマは「交流」であり、議論の素材として、広域的に展開する瀬戸内技法が選ばれた。瀬戸内技法の技術伝播や、変容のありかたを通じて旧石器時代における「交流」の実態に迫ろうとする試みであった。九州から東海地方まで、各地域で瀬戸内技法の伝播や変容に関する検討を行い、そうした成果を基として、集団間の交流について2日間活発な議論が交わされた。



写真2 中・四国旧石器文化談話会

遊動生活を基本とする旧石器時代における集団間の交流を、いかに捉えるのかという問題はたいへん難しいが、今回取り上げたような広域的に展開、あるいは変容するような石器製作技術を素材として丹念に議論を深化させていけば、その実態にある程度は迫れるのではないかと感じた次第である。

(小南裕一)

第42回 九州旧石器文化研究会開催報告

第42回九州旧石器文化研究会は、「福井洞穴の現代的意義」と題して、2016年10月8日～9日の2日間にわたって長崎県佐世保市で開催され、延べ約140名が参加して研究発表、討論、資料実見が行われた。

会では冒頭に、「福井洞穴の現代的意義—日本近代史における位置づけ—」と題して千葉大学名誉教授岡本東三氏による記念講演が行われ、東北大学鹿又喜隆氏による「福井洞穴の研究における課題と指針」、佐世保市教育委員会柳田裕三氏による「福井洞窟の再調査からみえるもの」と題する基調報告が行われた。また、九州地方における初源期の細石刃石器群について芝康次郎氏が、土器出現期の洞穴遺跡と開地遺跡について辻田直人氏が研究報告を行った。

今回の研究会は、東北大学による福井洞穴第3次調査の報告書刊行、佐世保市教育委員会による福井洞穴整備事業に伴う調査報告書刊行を受けて企画されたもので、1960年代に調査され日本における旧石器時代から縄文時代草創期にかけての研究に大きな影響を与えてきた福井洞穴を正面に据え、現在の研究の視座からその意義を捉え直そうとしたものである。当該期の様相は地域ごとに複雑かつ多様な様相を呈するためそう易々と理解できるものではないが、今回の研究会をきっかけに福井洞穴をはじめとする西北九州の洞穴遺跡の意義を再確認し、各地域の資料群の研究を深めることにより、新たな研究の展開を期待させる研究会となった。（馬籠亮道）



写真3 九州旧石器文化研究会

お知らせ

学会賞の推薦について（再募集）

「日本旧石器学会賞規定」に則り、2016年度の学会賞受賞候補の推薦を募ります。旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員を推薦してください。

1. 推薦内容：学会賞受賞候補
2. 推薦期間：2016年10月15日（土）～2017年2月15日（水）（必着）
3. 推薦者の資格：日本旧石器学会会員
4. 推薦方法
 - ・学会賞受賞候補の氏名、推薦理由、推薦者の氏名・連絡先をご記入の上、郵送もしくは電子メールにより下記の事務局宛に送付してください。
5. 注意事項
 - ・推薦は自薦・他薦を問いませんが、お一人につき一名を限度とします。
 - ・学会賞受賞候補は、日本旧石器学会会員に限ります。推薦にあたって、学会賞候補ご本人の承諾を得る必要はありません。推薦の書式は自由です。
 - ・推薦理由は概ね100字から300字にまとめてください。
6. 応募先・照会先

日本旧石器学会事務局（担当：鈴木美保・岩瀬彬）
〒192-0364 東京都八王子市南大沢1-1
首都大学東京 都市教養学部人文・社会系
歴史・考古学分野
電子メール jim@palaeolithic.jp

日本旧石器学会研究グループの募集

日本旧石器学会では、旧石器考古学およびこれに関連する研究課題について国内・国外の情報を交換し研究することを目的として、研究グループを設置しています。その「日本旧石器学会研究グループ規定」には自由に研究を行うことができる上、運営費を補助することも盛り込まれております。

つきましては2017年度の日本旧石器学会研究グループを募集します。研究グループの発足を希望する会員は、グループ名、代表者名、連絡先、研究目的、活動予定期間、参加者数、運営費交付希望の有無などを記入して本学会事務局に応募してください。募集期間は2017年3月31日（金）まで。応募・問い合わせ先は、日本旧石器学会事務局へ電子メールまたは郵送でお願いします。

メーリングリストの運用について

メーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものです。ただ、運用から2年以上がたちましたがまだ会員の約3割の方にしか登録いただけていません。まだ登録していない会員諸氏におかれましてはメーリングリストにご登録ください。メールアドレスを、事務局のメールアドレス（jim@palaeolithic.jp）までお知らせください。速やかにご利用できるようにします。強制するものではありませんが、ご協力をお願い申し上げます。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただきます。2016年度会費未納の方々につきましては、速やかに所定の会費の納入手続きをなされますようお願いいたします。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180 - 8 - 408055です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。

なお転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード（<http://palaeolithic.jp/join.htm>）し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第34号
2017年1月10日発行
編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会
氏家敏之・橋詰 潤・馬籠亮道
発行: 日本旧石器学会
事務局: 〒192-0364
東京都八王子市南大沢1-1
首都大学東京 都市教養学部
人文・社会系 歴史・考古学分野
E-mail jim@palaeolithic.jp
HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>